午前2時の
コインパーキング

午前２時のコインパーキング

仕事で疲れた体を少し横にしたくて、俺は運転席のシートを後ろに倒した。

「あぁ、よく頑張ったなぁ・・・」

無意識だったため、大きなあくびをしていたことにあくびの８割が終わった頃に気付く。
この日は予想以上に手間がかかったプロジェクトの締めくくりで、この時は出先で、総まとめとミーティングを終えた後だった。

腕時計を見ると、午前２時を少し回ったところだった。

出先での仕事はものの１時間ほどで終わったが、その間車をこのコインパーキングに留めていた。

残業もここまで来れば、法的手段に出てもおかしくないレベルだ。

俺は帰途につくため車に乗り込んだのだが、あまりに疲労が肉体にきていたのと、静まり返った夜のパーキングがやけに全身の脱力感を誘ったことが相まって、ほんの１０分、と自分に頼りない言い聞かせをしてしばらくの間だけ眠ることにした。

俺は自分のことを意志が弱い方だとは思わない。

しかしこの日ばかりは仕方なかった。

俺はそのまま深い眠りの中に入ってしまった・・・・。

“トンッ！！トントントンッッ！！”

薄暗いまどろみの向こうに大きな音が聞こえる。

“んっ！？”

・・・起きた俺の目に映ったのは、運転席のドアガラスを叩く誰か。

慌ててシートと同時に上半身を起こすと、おそらくはコインパーキングの管理人と思わしき中年の男性。紺色の作業着を着ているのが、パーキング内の電灯の明かりで分かった。

焦っている様子が見て取れたので、即座に窓を開けると彼は言った。

「乗っておられるんなら、そろそろここを出て行ってくれんかねぇ。いつもならこんなことは言わないんだが、さっきちょっとした事件が起こったもんで・・・」

「事件？」

体験版はここまでです。